

富山市四方沖海底の江戸期石材について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24727

富山市四方沖海底の江戸期石材について

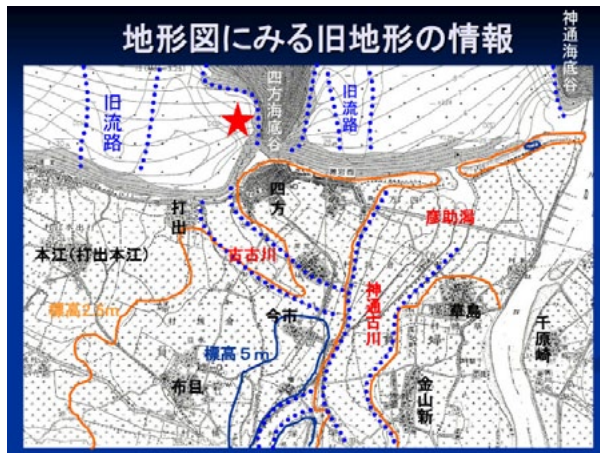
古川知明（富山市埋蔵文化財センター）

1 調査に至る経過

富山湾最奥部にあたる富山市四方周辺は、室町期とされる「廻船大法之巻」に挙げられる三津七湊の一つ「越中岩瀬湊」の候補地である。中世末までの越中の主要湊は守護所湊の放生津であり、岩瀬を疑問視する見解もあるが、四方東側に存在した別名八重津港・梅津港とも呼ばれた港は、近世前期における北前船寄港地として知られ、18世紀には大港十三港の一つ「八重津西岩瀬湊」と呼ばれるまでに発展した。この湊は、富山平野を形成する神通川の河口左岸に存在する。

一方、神通川河口右岸に存在するのは東岩瀬港であり、ここも中世岩瀬湊の候補地である。北前船寄港地として近世末まで発展を遂げ、近代以降は富山港として富山市周辺の物資輸送基地となっている。

神通川は、天正8年（1580）から万治3年（1659）までの間幾度かの洪水が発生し、神通古川から現神通川に流路を変えていった。これ以後西岩瀬港は砂の堆積により港湾機能が低下し、その機能が東岩瀬へ移転した。



星印が石材引き揚げ地点

富山市日本海文化研究所が主催する市民を対象とした日本海文化を考えるゼミナール学習会では、2002年から「中世岩瀬湊を探る」をテーマに、古地理・遺跡・石造物・伝承・古絵図・古記録・海底調査などの各分野から調査を行った。2004年4月からは富山商船高等専門学校（現富山高等専門学校商船学科）と共同で海底ソナー探査を開始した。探査範囲は神通川河口から足洗潟沖までとし、魚探用ソナーにより海底の突起物

の存在を調査した。周辺海域の底質は砂であり、平坦な地形を示す。ソナー探査の結果、足洗潟沖と四方漁港沖の2か所で帯状の突起物群を確認した。次に四方漁港沖において、水中カメラを投下し突起物を確認したところ、水深8～10mにおいて拳大～人頭大の川原石と1mほどの大形石が確認された。

以上までの途中成果は、2004,3「海中から中世岩瀬湊を探る 平成15年度海底探査報告」（『富山市日本海文化研究所報』No.33）として報告している。

2004年9月にはフォーラム「中世岩瀬湊を探る」を開催し、調査成果を報告した。

学習会が終了した2005年以降は中世岩瀬湊調査研究グループを立ち上げ、有志が調査を続行した。同年8月には四方漁港沖において海底の大石を1石引揚げた。

2005年9月には四方漁港沖においてマルチビーム測深による海底探査を行い、海底微地形の把握と、大石レベルの小突起物の分布情報を把握した。その結果、均平な平坦面とされていたが、微高地が存在すること、大石とみられる小突起物が50個以上存在することが判明した。

2005年10月には2石目の大石を引揚げた。

2 引揚げ石材1について

(1) 引揚げ位置：北緯36°45.816 東経137°11.433の北15m地点（GPSデータ）

(2) 規格：長84cm、幅44cm、厚32cm。長方体。

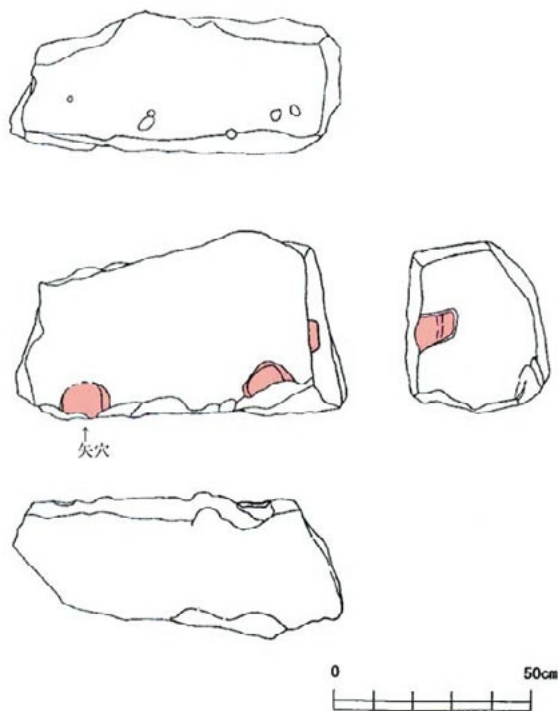
(3) 表面状況：海水に触れていた部分はカキ等付着し、劣化・剥落等。また、穿孔貝（ニオガイの仲間）のあけた穴が多数認められる。砂に埋まっていた部分は劣化がなく良好に残る。

(4) 加工状況：表面に2箇所、両側面に1箇所、方形の窪み（矢穴）が存在する。

(5) 石質：石灰質砂岩（高岡氷見海岸部に分布）

3 石材発見の意義

四方漁港沖300mから引揚げた大石は、人工的に割られた石材であり、石垣構築に用いる割石であることが判明した。この石材の産出地である高岡・氷見海岸部は、江戸前期加賀藩石切丁場となっており、慶長10（1605）年築城の富山城、慶長14年築城の高岡城、正保2（1645）年築造の前田利長墓所等に、石垣等石材として調達されている。現在でも丁場には矢穴を残す



石材が分布している。富山城へは舟・筏を利用し、四方を經由して神通川を遡上して木町湊に運搬されたと推定される。

また、江戸時代の古文書・古絵図によると、複数の津波による海岸浸食により、17世紀中頃には現在より700～750m以上沖に海岸線が復元される。四方沖300～350mで確認された石材は、江戸前期には陸地であったと推定される。

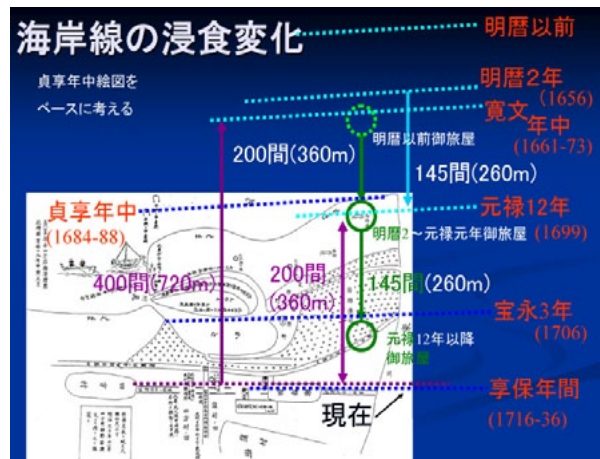
以上の状況から、石材は、複数の分布から、舟から落ちたなど偶発的なものではなく、付近の陸上にあった石積み、津波等で崩壊して海中に沈んだものとみられる。石積みは、裏込め用の栗石（小礫）を伴っており、石垣であると推定される。

旧神通川（古古川）の河口の先には、四方海底谷が存在する。ここは大型船の入港が可能であり、入江状となっていたとみられる。その西岸に当たる部分に今回発見した石材が多数存在していることから、護岸の目的は港湾部における海岸護岸等が考えられる。

4 遺跡としての取扱い

今後石材群の保護を目的に、「埋蔵文化財包蔵地」として取扱う予定である。名称等は未定。

5 おわりに



今回の調査は、海底構造物の調査方法をどのように行なうかのシュミレーションで終わったが、今後におけるより精密な調査方法を模索する端緒となったと考える。

文献

- 石井逸太郎 1952 「富山湾海岸地帯の地学的調査」
『富山湾海岸浸蝕調査報告書』
久保尚文 2008 『越中富山 山野川湊の中世史』桂書房
高岡 徹 2002 「古代・中世のころ」『萩浦郷土史』
高瀬重雄 1984 『日本海文化の形成』
中世岩瀬湊調査研究グループ 2004 「「海中から中世岩瀬湊を探る」15年度海底探査報告」(『富山市日本海文化研究所報』第33号)

(furukawa.tomoaki@city.toyama.lg.jp)